

保育の技術 (1) 遊び

原口 純子

自信の持てない保育者

幼稚園の今日的テーマの一つに「地域に開かれた幼稚園作り」とか、「幼稚園の幼児教育センター的役割」等というのがあります。週休二日制に伴う施設の有効利用とか、核家族化による育児不安に対する、ベテラン教諭の人材活用等の意味もあるかもしれませんが、しかし足元を見るとこの時代の要請としてのテーマも、自信をもつてうなずくことは難しい

のです。地域に開かれたということは、園庭を外部の人に解放することや、老人ホームの訪問ばかりが話題になりますが、本質的には、〇〇幼稚園はこういう保育をしていますよ、幼児期に大切なことはこういうことで、幼児は今こんな遊びをして、このように育っています、いつでも見たい方はおいでください、育児や子育てに心配ごとのある方は気楽に相談においでください、いつでもご相談に応じますよ、ということではないかと思えます。

しかし、幼稚園は開かれているでしょうか。幼稚園の中においてすら、学級閉鎖性の強いクラスはいくらでもあります。A子先生は他の人が保育室に入ることを好みません。ドアが常にしまっていて、入ろうとすると「なんででしょうか」などと言われ、園長ですら入ることをためらいます。多くの担任は父母の参観日も緊張し負担に感じます。ある時は、同学年三クラスが相談して合同の園庭サーキットを組み、どのクラスも同じ遊びを計画されてしまいました。父母にさえ自分のクラス経営を見せたくない教師が、地域になど開かれようありません。

もちろん他人に見られることは誰でも多少は緊張するものですが、保育者が、「自分はこんなつもりで、こういう保育をしてきました」という自信と誇りと責任がもてれば、父母に対しても、外部の訪問者に対しても心を開いて受け入れることができます。学級や園の閉鎖性が強いことは、保育者が保育に自信が持てないことに起因すると思われるま

す。自信があつて、心が開かれていればそんなに隠すことはないのです。とりあえず開かれた学級作りから始めて、地域などと言う前に父母に対して開き、良い連携がもてるようにすることがあり、一人一人の保育者が自信を持てるようになることが必要です。

子守化する保育者

環境を通して行う教育は、個性的な教師を生き生きさせ、優れた保育者を生み出している一方、子どもを見守るばかりの子守化した保育者も生み出していることに気がつきます。幼児を集めては、号令をかけたり、命令するような保育をやめたのはいいのですが、朝から、あちらにバラバラ、こちらにバラバラして時を過ごす幼児たちを、「幼児の主体性」という名の元に放置される実態に胸がいたみます。そして、恐ろしいことは、これが新しい保育のやり方であると錯覚し、なんの疑問も持たずに日々をす

ごしていることです。教育要領の高邁な精神を具体的な日々具現化することのなんと難しいことでしょう。

「教育技術」

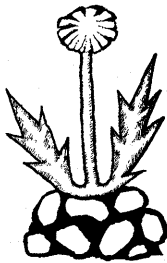
倉澤栄吉先生の「いま教師として」（小学館 一九九三年）という本の最初のエッセイに「教育技術者といわれて」という一文があります。「友よ」と語りかけるこの教育の大先輩の語りかけは、教育の技術をしっかりと身に付けることの大切さを説いておられます。教育技術は対象を変えれば、保育技術と言えましょう。

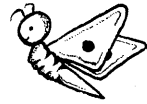
保育技術などと言いますと、かつての折り紙の折方やお遊戯の踊り方、手遊び、一斉に集めた保育の導入、展開、終結、ピアノ等を思い出し、古臭いものにとらえがちです。しかし、保育に技術はいらなくなったのでしょうか。環境を通して行う教育、遊びを通して行う指導、幼児にふさわしい生活、一人

一人に応じた指導という、今日求められている保育技術とはどんなものなのでしょうか。

プロフェッショナルな保育者

身の回りにも素晴らしい保育者が何人もいます。彼女たちは、受け持ったクラスの幼児を実に生き生きとかわいらしく、良く育てます。幼児ひとりひとりの輪郭がはっきりしています。これはそれぞれの個性が活かされていることを示します。そのクラスのことを思い浮かべる時、園長ですら名前と顔とが





パッとイメージできます。

クラスが集団としてよい高まりを感じさせてくれます。障害を持った幼児や、

むずかしい幼児がいる時に

も、その幼児を含めていた

わりの気持ちや、やさしさが育ちます。父母の信頼

も厚く、母親同士も友達になり、良い関係が形成されます。

B子先生はクラスも上手に育てますが、全園児百三十名の親子のレクリエーションを指揮して、新しいフォークダンスを教えゲームを楽しく盛り上げる事ができます。このような力もプロのものといえましょう。

クラスの子どもたちを、ひとりひとりキラキラ光る宝石のように輝かせ、暖かい居心地の良いクラスを運営できる教師こそプロの教師といえましょう。

多くの優れた保育者を見ると、保育の専門家

としての力量というのは、感性や人柄など適性によるところも大きいのですが、しかし、自分に託された幼児に良い成長と幸せな日々を贈りたいという誠実さや責任感、意欲、情熱があり、よく勉強し、悩み、教材を研究し、準備に労をいといません。

情熱と確かな知識、確かな技術

幼児教育の現場にある者にとって必要なものは、プロフェッショナルな職業人としての幼児教育への情熱と確かな知識と、確かな技術ではないかと思えます。

保育教材を扱う業者が近頃は保育関係の専門図書、特に理論的なものはほとんど売れなくなったと嘆き、コピーでできる、クラスだよりやパネルシアターの本を紹介し、イラストと写真やまんががいっぱいある週刊誌と見まごう月刊の保育雑誌をおいていました。時代の変化の中で幼児教育者のイメージもすっかり変わったということかもしれません。

しかし、幼児教育で給料をとるということは、プロなので、情熱を持って、しかるべき知識と力をつけなければなりません。

今日の保育における技術とは、誤解を恐れずにいうならば、一つは幼児理解及び援助の在り方と、今ひとつは、遊び（具体的な教材、教具、遊び方）ではないでしょうか。この二つが車の両輪として回っていく必要があります。

かつての保育が、活動を与えることに走り過ぎた反省から、大切なのは「ねらい」「内容」「環境」ということが強調され、指導計画や指導案からすら、具体的な活動名は記入されなくなっています。なぜならば、活動は幼児が直接環境にかかわって作り出すものとされたからです。しかし、担任教諭にしてみれば大方の予想は立っていないかもしれません。

幼児理解とか、発達理解なども具体的に、おにごっこをしている姿や牛乳パックで自動車をつくっている姿から、幼児が理解できるわけで、具体的な

遊び（活動）ぬきに幼児を理解することは不可能です。むしろ欠落しているのは、遊び（適切な教材や方法）についての知識と技ではないでしょうか。

遊びを知ろう

幼児教育のキーワード、「遊びを通して育てる」というならば、教師は遊びについてプロでなければなりません。遊びの種類、遊びの手順、一つの遊びから可能なバリエーション、年齢に合わせた配慮など。

事例 油粘土を与える

四歳の四月 保育室の机に幼児が六人ついています。個人ロッカーからそれぞれ押し型図案つきの粘土板、粘土ケースに入った直方体の新品の油粘土を持ってきて、粘土で遊ぼうとしているのですが、四歳の指の力で直方体の粘土は、ちぎることもできず丸めることもできません。型押しに押しつけて

チューリップなどを写しだしています。

飛び抜けて悪い例ですが、おそらく全国の四月の幼稚園でけっこう見かける風景ではないかと思えます。

四歳の幼児の握力、粘土で何を経験させたいかの視点など、粘土の教材一つ取ってみても、どんなに勉強不足で、配慮に足りないかがわかります。教材を選ぶ時点で、なぜ押し型図案のついた板をえらぶのでしょうか。粘土をなぜ個人持ちにしてロッカーにしまうのでしょうか。

四歳の幼児が「粘土って楽しい」と思えるためには、幼児の手で扱える程の大きさにちぎったものがお盆にでものっければよいのです。粘土板はなにもないシンプルなものが多いのです。型がついていると、粘土を型におしつける遊びに終わってしまうからです。粘土ははいたり、まるめたりへびにしたりして、自分の指と腕の力で動かせるものとし

て、十分に扱って欲しいのです。はじめからクッキーの抜き型や型押しを与える必要もありません。教材の一つ一つについてそれが幼児の成長に望ましいものとして機能するように与えなければ、教師が「粘土の楽しさ」を経験させたいとねらっても、幼児は、「幼稚園の粘土は堅くて疲れる」ということを経験することになるのです。

何も考えず、本も読まず、去年のとおり繰り返す保育をやめて、ひとつひとつ吟味することが必要なのです。

遊びのレパートリーを増やす

保育者が遊びの種類を沢山知っていて、幼児の成長や季節に合わせて自在に使いこなせることこそ、それは大切な人的環境であり、保育の技術です。

研究会のテーマに「自ら遊びや生活を作り出す幼児の育成」などが、取り上げられています。自ら遊びを作り出すようになるためには、それまでに存

分様な遊びを経験して初めてできることです。これは、自立心が十分な依存経験を経て初めて育つことと同様です。そうすると特に二年保育の年少時代は保育者と一緒に沢山の遊びを経験することが大切なこととなります。

大人は子どもと楽しく遊ぶことは容易なことではありません。保育実習に来た学生が珍しいものの好きの幼児に「遊ぼうよ」と言われて、手をつないだまでは良いのですが、どう遊んだらよいのかわからず呆然としている姿にしばしば出あいます。幼児と楽しく遊べることを保育のプロと申せましょう。

アメリカにいたころ、本屋さんに子どもと遊ぶHOW TOものの本が沢山出ていたことを思い出します。もちろん幼児を楽しく遊ばせたいということもあったでしょうが、ベビシッターに子どもをあずける習慣があり、誰でもが子どもを楽しく遊ばせる必要があったこともうかがえます。



◀『新訂 わらべうたであそぼう』
(コダーイ芸術選書20・23 明治図書)
写真手前から、乳児・年少・年中・年長編

赤ちゃんのはり絵

用意するもの

- 1 古い雑誌(育児関係のもの)
- 2 ボール紙
- 3 のり



あそび方

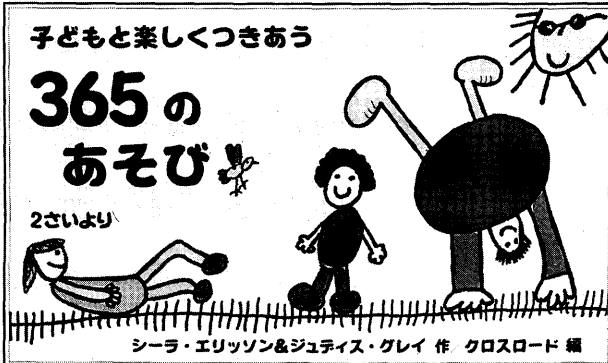
これから赤ちゃんが生まれ、おや妹ができる子どもにとって最適なあそびです。子どもといっしょに古い雑誌を見ながら、赤ちゃんやベビー用品、たとえば、おむつ、ゆりかご、おもちゃ、ベビー服などの絵を見つけましょう。切りぬいて、ボール紙の上にならべてのりづけし、はり絵をつくりましょう。できあがったら、子どもの目につくところにつるして、はり絵を見ながら、赤ちゃんのことについて話してください。

271

子どもと楽しくつきあう

365の あそび

2さいより



シーラ・エリッソン&ジュティス・グレイ 作 クロスロード 編

▲『子どもと楽しくつきあう365のあそび』(クロスロード)

上段は271番目のあそびの紹介 子どもの描いたイラストも楽しい

遊びを学ぶ

近頃は我が国でも沢山の遊びの本が出版され、それぞれ遊びのプロとされる方々が、講習会を開いて遊びの指導をしています。

福尾野歩さんの遊びの講習会はいつも満員で、二時間ほどの時間はアツという間に楽しく過ぎてしまいます。しかし、さて、習ってきたものを自分でやってみようとすると、とうてい野歩さんのように面白くはできません。単純なものほど難しく、どうしてあんなに面白かったのだろう、と夢からさめたシンデレラの洋服のように色さめて感じられます。遊びが単に方法が分かればできるものではなく、強烈なその人の持つ雰囲気やキャラクターが、場を支配していたことがわかります。しかし、遊ぶことがどんなに楽しいかを経験することは、やはり、明日からの保育に力を与えてくれます。

平凡な保育者が子どもと楽しく遊ぶために

先生が楽しい遊びを沢山知っていることはとても大切なことです。

わらべうたは優れた教材です。誠実に学ぶことによって誰でも身につけることのできる遊びです。

一九九一年に翻訳出版された『子どもと楽しくつきあう365のあそび』（シーラ・エリッソン&ジュディス・グレイ作 クロスロード編 クロスロード）はごく身近な生活のなかから、子どものレベルで遊べる楽しい遊びが三百六十五紹介されています。園芸、音楽、工作、ゲーム、自然、食べもの、ダンス……十三の分野に渡る楽しい遊びのアイデアはきつと幼児の生活を豊かに、楽しいものにしてくれると思います。

遊びこそ保育の大切な技術なのです。

（洗足学園短期大学）